

般若經の三乗における菩薩乗の意味

渡 辺 章 悟

はじめに

仏教の目的は悟りを得ることであり、その体験をブッダが語ることから仏教は始まる。その悟りは *anuttarā samyaksambodhi*（阿耨多羅三藐三菩提，無上正等覺，無上正等菩提）といわれたが，原始仏教や部派仏教ではこの悟りと区別して，阿羅漢になることを目的とする阿羅漢菩提，あるいは声聞菩提が説かれ，ブッダの悟りと区別するようになった。初期の仏教では弟子と師たるブッダの悟りには明確に一線が画されていたのである。したがって，大乘仏教で凡夫の弟子たちが発菩提心（無上正等覺心）を発して正覺を得ることができると宣言するに至るまでは，教理的にかなりの飛躍があることがわかる。

その間の悟りの考察についての発展を示す概念が，主に有部などで説かれた三種菩提説であり，それが三乗という大乘仏教に特有の思想へと展開するのである。

三菩提説は声聞菩提・独覺菩提・仏菩提からなるが，仏菩提とはブッダの悟りそのもの——無上正等正覺である。そして，この声聞・独覺・仏の三菩提に基づきながら，〈ブッダの悟りこそが，菩薩の悟りである〉と読み替え，菩薩を強調するのが三乗説に他ならない。

しかし，菩薩が悟りを求める者という意味であるならば，声聞も独覺も，立場や実践こそ違え，悟りを求めるという限りでは同一である。そうであるなら，三乗の菩提を求める者は，同じく菩薩と呼ばれてもいいはずである。しかし，三乗のすべてが，菩薩に集約されるならば，三乗や三菩提は何のために説かれたのか，といった議論もある。これに類似した見解はすでに『婆沙論』に見られる。

『婆沙論』では，「〔五趣の行法を實踐し，解脱している〕彼の阿羅漢は，先には是れ菩薩の種性なり」と述べたり，諸縁の性が実有と見る立場から，あるいは諸縁を観察する智の相違から三種を区別するなどという。これらの言明には二諦の語こそないが，世俗の立場で三菩提を説いていることも推測できる。後述する

(174)

般若經の三乗における菩薩乗の意味（渡 辺）

ように、この説は小品系般若にはなく、大品系般若に投影されている。

大品系の般若經では、三乗の解釈に二諦説を適用して、世俗諦であることを明示する。あるいはそれが畢竟空を根拠とすることに言及する。また、三乗中の仏乗を菩薩乗、あるいは大乘と読み替えて、そこから一乗思想が発生する道筋をつけた。この場合の一乗とは菩薩乗であるが、それには二乗を越える唯一の乗という意味と、悟りを求める菩薩という意味での菩薩乗という二義がある。このような菩薩乗の解釈こそが、三乗思想を解く鍵となっているのである。

1. 初期仏教文献の三乗

阿含等の初期仏典には三乗の語はないが、三種の種性を格別して論ずる傾向は見られる。非常にまれな例ではあるが、『雜阿含』(635)に、「比丘が四念処を修習することによって、未だ浄らかでない衆生を浄らかにし、浄らかな衆生にはさらに光沢を増加させる。この浄らかな衆生のように、未だ彼岸に渡っていない者に、阿羅漢を得させ、辟支仏を得させ、阿耨多羅三藐三菩提を得させる」(大正2, 176a)とする。ただし、四阿含中に三乗は見られない。唯一の例外は『増一阿含經』であるが、本經には、菩薩や大乘、六波羅蜜などの語が見られ、三蔵の分類においても、「契經(阿含)・律・阿毘曇[經]の三蔵に加え、方等など大乘の玄邃な(奥深い)義をもつ經典類を雜蔵とする」というように、明らかに大乘を知っており、後代の大乗の影響が見られる(大正2, 550c10)。さらに修行階梯を見ると、伝統的な四向四果の階梯はもちろんであるが、これに声聞乗・辟支仏乗・仏乗の三乗を知っており、「今、この衆中に、四向四及び声聞乗、辟支仏乗、仏乗あり。それ善男子善女人ありて三乗の道を得んと欲せば、当の衆の中にこれを求むべし」とあり、四向四果の上に三乗を置く聖者の階梯を踏まえた記述が複数見られる(大正2, 792b-c, 653a8-11)。これは後述する般若經と同じ言明である。

2. 有部系論書の三種菩提の説

三種菩提とは、「声聞菩提・独覺菩提・無上菩提(仏菩提)」の三種をいうが、般若經ではそれを得るのが三乗であると明確に述べている([Kimura 2006: 97, ll. 26ff.], 『大般若經』大正7, 164c7-19)。その意味で、三菩提は三乗の祖型と言える。これは毘奈耶を含め(大正23, 673c, 798a; 大正24, 15c)、説一切有部の論書でしばしば見られる用語で、例えば『施設論』には「所謂、無上正等菩提・縁覺菩提・声聞菩提は彼岸法に到る」(大正26, 520a5, 23), 『法蘊足論』「多界品」には「能く声聞・

独覚・無上菩提を証得す」(大正 26, 502c) という語が見える。極めてまれな例ではあるが、明らかに説一切有部の教理の中に位置づけられる。また三種菩提は、二世紀頃編集されたとされる『大毘婆沙論』になるとしばしば言及され(大正 27, 70a13, 251a24, 283b10, 343a19, 662c11), さらに三乗説と関連させた三乗種性(大正 27, 33b21, 520a11) や三乗菩提(大正 27, 159b28, 428b19) という語さえも用いられるようになり、三[乗]菩提説として『俱舍論』や『順正理論』に受け継がれる。

一方、パーリ仏教では、『清浄道論』(*Visuddhimagga*, PTS I, p.214) に至って「三菩提」があらわれる。しかし、これは現等菩提(*abhisambodhi*) と辟支菩提(*pacceka-bodhi*) と声聞菩提(*sāvaka-bodhi*) からなるもので、用語も異なりがあるし、さほど重視しているようには見えない。

3. 三種の菩提は同一か? ——『婆沙論』所説——

次に、『大毘婆沙論』の中に説かれる三種の菩提と、三乗に関連する代表的箇所を引用する。

(1) 声聞・独覚・正等覚者の解脱は同一か?

經に説くが如し“如来の解脱と余の阿羅漢等の解脱と異なることなし”と。[略] 答う，“三乗身中の解脱は異なると雖も、而も善と常なること同じが故に、異なることなしと説くなり。復次に、この言は、一相続中に三乗道ありて、同じく解脱を証することを顯示するなり。謂く、他身所証の解脱を望めば、各々異なりありと雖も、而も一身中に三乗の性ありて、同じく解脱を証す。何の乗に随依して聖道を引き起こすにせよ、皆、能く此の涅槃を証得するが故なり”。(『大毘婆沙論』大正 27, 162b23-29)

(2) すべての衆生に三種の菩提があり、それを求める者に区別はない。

一切衆生に尽く三種の菩提性有り。所謂、仏・辟支仏・声聞の菩提なり。若し仏の道を去りて従り、亦た此の法を証す。若し辟支仏・声聞の道を去りて従り、亦た此の法を証す。是の故に無差別と言うなり。(『阿毘曇毘婆沙論』大正 28, 122c15-17)

(3) 五趣の行法の阿羅漢は菩薩の種性であって、已に解脱している。

問う、何が故に阿羅漢はすでに解脱を得するに、而もこの法を修して自らを拘縛するや。答う、彼の阿羅漢は先には是れ菩薩の種性(姓)にして、有情の悪を造り苦を招くに忍びず、彼を苦より抜かんが為の故に、恒に是の念を作す。“我は無始よりこのかた諸の有情とともに互いに纏縛を起し、五趣に輪廻し、諸の劇苦を受けたり。我は幸に免れることを得て、復、応に彼らを救うべし”と。[略] 故に、阿羅漢は自ら解脱すと雖も、而も有情のために無諍行を起すなり。(『大毘婆沙論』大正 27, 898c25-899a6)

(4) 所縁が性として実有であるために、三種菩提を設ける。

復次に、諸縁の性にして、実有に非ずんば、応に三種の菩提を施設すべからざらん。謂

(176)

般若經の三乗における菩薩乗の意味（渡 辺）

く、上智を以て縁性を觀察するを仏菩提と名づけ、若し中智を以て縁性を觀察するを獨覺菩提と名づけ、若し下智を以て縁性を觀察するを聲聞菩提と名づく。（『大毘婆沙論』大正 27, 283b10-13）

以上のように、(1) では一相統、一身中に三乗があること、および三乗は皆同じ涅槃に至る道なのだから、その解脱に区別はないとする説が述べられる。(2) は、菩提を求める有情が菩薩ならば、聲聞の菩提でも同じく菩提であるのだから、三乗の菩提を求める者は、同じく菩薩と呼ばれてよいはずである。しかしながら、ただ無上菩提を求める者だけが菩薩と呼ばれ、聲聞菩提や獨覺菩提を求める者は菩薩とは呼ばれない理由は何かを述べたものである。ここでも三種に区別がないことを述べている。(3) は、五趣の行法の阿羅漢は已に解脱しているのに、なお無諍行を修するのはなぜか？という問いに対する回答である。その中で阿羅漢に菩薩の種性があることを述べ、自ら過去に劇苦を受けたことを記憶し、一切の有情が苦に沈むのを救わんとし、有情のために無諍行を起すというもので、まさに大乘の菩薩の思想と共通する。(4) は、認識対象が実有でなければ三種菩提を設定することもできない。対象を認識する智慧の相違によって、三種の菩提を区別しているという説である。これらは三菩提説と三乗において、それぞれに区別があるかどうかという問題を論議するものであり、般若經中の教説とよく対応する。また、三種菩提の差別論に依じて、三乗種性を述べ、その中で仏乗を菩薩乗と表現している（同 33b12）ことなどから、『婆沙論』と大乘の三乗説との関連は疑い得ない。

4. 小品系の菩薩乗の用例

4.1. 漢訳諸本の菩薩乗

三乗説の中で最も重要なのは仏乗あるいは菩薩乗である。最初に小品系の般若經諸本における「菩薩乗」の用例をみると、『道行』、『大明度』、『鈔經』という古訳にはこの語がない。ところが408年羅什訳『小品』になると2箇所（3例）登場し（大正 8, 563c6, c7, 564c15）、985年施護訳『仏母』には16箇所（26例）と増加する。同じ傾向は、「仏乗」についてもいえる（大正 8, 563c）。このように、初期般若經の系統では必ずしも菩薩乗という概念が確立していたとは言えず、後代の翻訳になるに従って、菩薩乗という語が用いられるようになったことがわかる。

ただし、菩薩乗や仏乗、あるいは二乗や三乗という語は用いられないが、すでに最古の『道行』の中で、批判の対象として阿羅漢辟支仏を纏めて論じたり（大

正 8, 459b5-6), [阿]羅漢・辟支仏地に対する仏地に言及し (454b18, 467c18), 菩薩は二地に墮せず (458c10-21) と述べたりすることから, 般若経の初期の段階から, 伝統的な修行者に対する批判として, 新たな修行道を菩薩に提示するというテーマがあったことは指摘できる。

4. 2. 『八千頌般若』の菩薩乗

『八千頌般若』（以下 AS と略）には三乗に言及する二つの例がある。最初は第三章「塔品」にある、熟語としての三乗 (*yāna-traya*) に言及する唯一の例である。

そこで四大王は世尊に次のように申し上げた。「世尊よ、この般若波羅蜜を手に取り、記憶し、唱え、学習し、宣布するその善男・善女が、衆生を三乗において訓練し、しかも衆生という想いを起こさないとは、希有なることです。」([Wogihara 1973: 190, l.15])

この箇所に対応する七種の漢訳を見ると、すべての対応箇所に欠けている。おそらく小品系統では三乗という教説は確立していなかったからであろう。

もう一つは、AS「真如品」第十六における三乗の用例で、これはシャーリプトラ長老の「法性において、すべてのものにとどまらないという方法に (*sarva-dharmāsthāna-yogena*) とどまっている」というスプーティ長老への反問である。

また実にスプーティ長老よ、如来によって三種の菩薩乗〔によって修行する〕人々が説かれているが、〔あなたの説によれば〕それら三種の確定は存在しないことになる。なぜなら、スプーティ長老の所説では、唯だ一つの乗り物、すなわち仏乗〔である〕菩薩乗があるだけとなるからです。

ye ca khalu punar ime āyusman subhūte trayo bodhisattvayānikāḥ pudgalās tathāgatenākhyātāḥ, eṣāṃ trayāṇāṃ vyavasthānaṃ na bhavati / ekam eva hi yānaṃ bhavati yad uta buddhayānaṃ bodhisattvayānaṃ yathā āyusmataḥ subhūtir nirdeśaḥ. ([Wogihara 1973: 657, ll.15-19])

上記のように、仏乗・菩薩乗はただ「一つの乗り物」(一乗)として同一視される。このシャーリプトラの反問に対して、スプーティ長老は次のように答える。

シャーリプトラ長老よ、真如 (*tathatā*) の真如なるもの、そういう真如において、声聞乗によって、あるいは独覚乗によって、あるいは大乘〔によって修行するもの〕であれ、ただ一種の菩薩さえもあなたは見るであろうか？ ([Wogihara 1973: 658, ll.19-22])

このように、シャーリプトラ長老よ、〔最高の〕真実の立場、永遠性の立場からすれば、その菩薩のありよう (*bodhisattva-dharma*) が認識されないのに、どうして“これは声聞乗によって修行するものである。これは独覚乗によって修行するものである。これは大乘によって修行するものである” (*ayaṃ śrāvakayāniko 'yaṃ pratyekabuddhayāniko 'yaṃ mahāyānikah*) ということが、あなたに生まれようか？ ([Wogihara 1973: 659, ll.15-18])

上記のように、まず三乗を「如来によって説かれた三種の菩薩乗」と表明し、仏乗である菩薩乗と同一視しながら、三乗を声聞乗、独覚乗、大乘によって修行

(178)

般若經の三乗における菩薩乗の意味 (渡 辺)

するもの (*mahāyānika*) とも言う。この文脈から以下の二つの言明が読み取れる。

①如来は、三乗はすべて菩薩乗であると説かれている。

②真如の立場からは三乗には区別はない。三乗のすべてが仏乗である菩薩乗であり、それをただ一つの乗りもの（一乗）とする。

これらの主張の検討は後述するが、ここで確認しておくべきことは、この箇所に対応する漢訳經典のすべてが三乗を「声聞・辟支仏・仏乗」とすることである。つまり、AS では、最後の菩薩乗・大乘・仏乗が交換可能であるのに対し、漢訳ではそうではない。三乗の第三は仏乗と確定されるのである。これはアビダルマ以来の三菩提、三種性という伝統的な教説に基づいたものと言えよう。

5. 大品系の菩薩乗

5.1. 『一万八千頌般若』の菩薩乗

AS における三種の菩薩乗と仏乗の関係は、『一万八千頌』（以下 AD と略）において、より明らかとなる。同経（AD チベット語訳）は、小品系の漢訳を受けながら、さらに明快に「長老シャーリプトラよ、真如において、三種の菩薩を認めるのか？ 声聞乗の菩薩、独覚乗の菩薩、仏乗の菩薩を認めるのか (*sangs rgyas kyi theg pa pa'i byang chub sems dpa' 'dod dam*)」と述べる (Pek., vol.20, 162a8)。ここにおいて、先に引用した AS が、AD の仏乗を菩薩乗、あるいは大乘として強調した、より新しい文脈であることが、分かるであろう。

5.2. 『二万五千頌般若』の大乘への変化

同様の傾向が『二万五千頌』（以下 PV と略）にも指摘できる。例えば、PV 第二章に「なぜなら、そのようにこの般若波羅蜜[経の中]で詳細に説かれた三乗は、声聞乗、独覚乗、大乘 (*mahāyāna*) なのである」 ([Kimura 1986: 34, ll.1-17]) という用例があるが、対応する漢訳諸本を見ると、この系統の最古訳である『放光』（大正 8, 43a11-24）では三つの乗の名前は述べられていない。ついで、『大品』（大正 8, 279c9-12）では「是の般若波羅蜜中に広く三乗の教えが説かれる。所謂、声聞、辟支仏、仏乗なり」とあり、第三乗は仏乗と訳されている。

さらに、『第二会』（大正 7, 145c16-17）になると、「三乗の聖教を施設する。謂く、声聞、独覚、無上乘の教えなり」とする。このように漢訳では三乗という概念化が明確にされている場合には、三乗の第三は、仏乗、あるいは無上乘とするが、サンスクリット本では *mahāyāna* となる。なお、チベット語訳（経部）では、「声聞乗、独覚乗、無上 正等覚者の乗 (*[bla na med pa] yang dag par rdzogs pa'i sangs rgya*)

kyi theg pa)」と玄奘訳に近似するが、論部に属するチベット語訳は、声聞乗、独覺乗、大乘 (*theg pa chen po*) であり、現觀の影響下にある梵本と一致する (PV Tib. Pek. ed., vol.18, Ti, 143a2, b2, 4. Pek. ed., vol.89, nGa, 45a4, 6, 8)。ここでも、仏乗（無上乘，正等覺乗，無上正等覺乗）から大乘への移行が見て取れる。

6. 小品系と大品系における三乗理解の相違

6.1. 三種の菩薩乗

漢訳諸本に見られるように、小品系の初期の段階において菩薩乗を含んだ三乗は見られなかったし、三乗という語そのものも確実な用語とはなっていなかった。また、上記の梵文 AS では、三乗について「如来によって説かれたこれら三種の菩薩乗〔によって修行する〕人々」(*trayo bodhisattvayānikāḥ pudgalās tathāgatenā-khyātāḥ*) [AD, PV, Chap.4 でも同様] (AD [Pek., vol.20, 162a4-5], PV [Kimura 1990: 133, ll.18-19]) とするが、漢訳は『小品』「仏説三乗人〔則無差別〕」(563c4-5), 『大品』「仏説求道者有三種〔阿羅漢道。辟支仏道。仏道。是三種為無分別〕」(337c10-11) と異なっている。

もちろん上記 AS の例は唯一の例外であるが、ここで注目されるのは、〈三乗とは菩薩道の三種類〉であると考えられていることである。ここに対応する AD (チベット語訳) も PV も「菩薩乗の三種に区別はない」(*trayāṇāṃ bodhisattvayānikānām pudgalānām vyavasthānam na bhaviṣyati*) と繰り返している。つまり、三乗とは菩薩の三つの修行形態を言っているのであり、これが前述した「一〔仏〕乗」の意味なのである。その意味では、二乗の人々も本来菩薩であるという『法華經』の「開会の思想」を想起させる。

6.2. 一乗の意義

また、『小品』も『大品』も三乗を「声聞乗，辟支仏，仏乗」とし、如来はこのような三種の菩薩乗を説いたとしているが、真如の立場から言えば、菩薩のあり方は一つである。この「一つの菩薩」が、AS の「ただ一つの乗り物，つまり仏乗〔である〕菩薩乗だけがある」(*ekam eva hi yānam bhavati yad uta buddhayānam bodhisattvayānam*) という意味である。

この「ただ一つの乗り物」に対する小品系漢訳諸本を見ると、『道行』(454a), 『大明度』(494b), 『鈔經』(526b) は「一道」と訳し、『小品』(563c) は「一乗〔人〕」と訳した。確かに、これは後代の一乗思想の萌芽として、注目される思想だが、同一ではない。あくまで菩薩道を重視する思想の中で述べられた文脈にすぎない。

(180)

般若經の三乗における菩薩乗の意味（渡 辺）

一方、PV も「これら三つの菩薩乗の人々」([Kimura 1990: 133, Ⅱ.19-20]) といい、続けて「菩薩摩訶薩はただ一つとなるだろう。つまり〔長老スプーティが説いたような〕菩薩乗である」(*eka eva bodhisattvo mahāsattvo bhaviṣyati yad uta bodhisattvayāniko*) とし、三つの菩薩乗を、「声聞乗の菩薩、独覺乗の菩薩、菩薩乗の菩薩」、あるいは「声聞乗の菩薩、独覺乗の菩薩、仏乗の菩薩」と明記する。([Kimura 1990: 133, Ⅱ.21; 134, Ⅱ.2-3, Ⅱ.16-17]) このように、三乗すべてに共通する菩薩の存在を述べる。

6.3. 仏乗から菩薩乗へ

一方、チベット語訳 AD では、「長老スプーティによって説かれように、“菩薩摩訶薩はただ一つの仏乗に属するものである” (*byang chub sems dpa' sems dpa' chen po ni sangs rgyas kyi theg pa pa gcig bur 'gyur ro*)」とする ([Kimura 1990: 162a5-6])。

この「一つの仏乗に属するもの」に対応する大品系漢訳諸本を見ると、『放光』(大正 8, 85b)「一乗」、『大品』(大正 8, 337c)「一菩薩乗」、『第二会』(大正 7, 258a)「一菩薩乗、一正等覺乗」となり、次第に仏乗が消えてゆく。

さらに PV では、「ただ一つだけの菩薩・摩訶薩となる。すなわち長老スプーティが説いた菩薩乗である」([Kimura 1990: 133, 20-22]) とし、時代を追って菩薩乗に視点が移ってゆく。このように、「仏乗の菩薩」は「菩薩乗の菩薩」へと入れ替わる。なお、大品系最古訳の『放光』(大正 8, 85c2) では、三乗を「羅漢乗、辟支仏乗、菩薩仏乗」とするように、菩薩乗は独立しておらず仏乗と一体である。これはまさに小品系と大品系の間形態を示すものである。

いずれにせよ、〈三種の菩薩〉という考え方は小品系・大品系に共通であるが、AS が三乗の最後に菩薩乗を取らずに大乘、あるいは仏乗を配置するのに対し、AD は「仏乗」、『放光』は「菩薩仏乗」、PV は菩薩乗をとる。ここにおいて、後代の三乗の観念が次第に確立される過程が読み取れる。

まとめ

以上のように般若經の三乗思想と言っても一様ではなく、『婆沙論』などの部派仏教の「声聞・独覺・仏」という三種性、三菩提の教説から、菩薩思想の発達にともなって、般若經諸本の中で菩薩の修行道としての三乗思想が確立していった。特に初期の小品系統では三乗の教説は確立していなかったが、次第に三乗の語も見られるようになる。しかし、その場合でも三乗の第三は菩薩乗ではなく仏乗であった。それが、徐々に第三の仏乗を菩薩乗と読み替えるようになり、大品系統では「声聞・独覺・菩薩」という形に集約されてゆく。そして、大乘という

意識も明確になり、最終的に菩薩乗こそが大乘、あるいは無上大乘（*anuttaram mahāyānam*）とも言われるようになった。それとともに、ADに明確に見られる〈三種の菩薩〉という思想を介在して、仏乗から菩薩乗、大乘、さらには一乗という変化も、漢訳諸本の新古の中に、時代を追って読み取ることができたのである。

また、三乗思想は大品系で確立されるが、そこに見られる菩薩乗は、二乗を超える唯一の乗（道）であり、同時に三乗すべてに共通するとされる。そこには菩薩に二つの意味を付与していることが分かる。一つは声聞・独覚の二乗を超越する道を行う菩薩で、二乗に対して相対化した意味を付与するものである。もう一つは菩薩の原初的な用法で、悟りを求める者という義に基づき、大乘が推奨する唯一の乗（道）を実践する者ともなる。

この意味での菩薩は、『大品般若』が〈求道者〉と訳すように、声聞乗であれ、独覚乗であれ、菩薩乗（仏乗）であれ、悟りを求めて実践するという意味ではまったく同じ価値を持つ。声聞乗の菩薩、独覚乗の菩薩、菩薩乗の菩薩という不可解な文脈は、その意味でのみ理解しうる。それは真如という立場から、同一であるというという説明もあるが、畢竟空や真如を持ち出すまでもなく、菩提を目指して仏道を踏み行う者という意味で等しいということでもある。このことは『婆沙論』等で説かれる三種菩提説と共通の論理であり、大品系がその教説を踏まえながら、空性論理によって三乗説を再解釈したことは十分予想される。

〈略号 参考文献〉

- [Kimura 1986]: Takayasu Kimura, ed. *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (二万五千頌般若) II, III. Tokyo: Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd., 1986.
- [Kimura 1990]: Takayasu Kimura, ed. *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (二万五千頌般若) IV. Tokyo: Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd., 1990.
- [Kimura 2006]: Takayasu Kimura, ed. *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (二万五千頌般若) VI–VIII. Tokyo: Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd., 2006.
- [Wogihara 1973]: Unrai Wogihara, *Abhisamayālaṃkāraḥ Prajñāpāramitā vyākhyā, The Work of Haribhadra*. Tokyo: Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd., 1973 (1st pub., Tokyo: The Toyo Bunko, 1932).

〈キーワード〉 般若經、『婆沙論』、三乗、三種性、三種菩提、一乗
(東洋大学教授、博士(文学))